

≪研究報告≫

成人看護学実習における学生の満足度と教員の関わりや実習目標の理解度・到達度の関係性の検討

村岡 祐介¹⁾, 舘山 光子¹⁾, 井澤 美樹子¹⁾, 土屋 陽子¹⁾

要旨：本研究の目的は、看護学生の実習における満足度と実習目標に対する理解度・到達度、また実習教員の関わり方を把握し、教員の関わりが満足度または理解度・到達度にどのように影響しているかを明らかにすることである。A大学の成人看護学実習を行った看護学生51名に無記名自記式アンケート調査を行った。その結果、満足度を高める影響因子として、「教員は学生の意見を認めた上で、アドバイスや指導を行ってくれた。」「教員は学生が困っているときに助けてくれた。」「実技を体験する機会は十分にあった。」「実習指導者（看護師）に対して教員は連携が取れていた。」という教員の関わりが関係していた。さらに、実習における満足度と実習の理解度・到達度については相関関係があり、満足度が高いほど、学生の実習への理解度・到達度が高くなることが示唆された。つまりは、実習における教員の関わりによって、学生の満足度を高めることができ、満足度が高まることで、学生の実習目標の理解度や到達度を高めることにつながる。

キーワード：看護学生、実習満足度、教員の関わり、実習目標の理解度・到達度

I. 序 論

近年看護系大学の乱立とも言われるように1991年に11校であった看護系大学は2017年には255校と急増している。その中で言われるのが、教員の人員不足と教育水準の維持向上における課題である。文部科学省では、看護系人材の養成については、大学とその実習施設である病院並びに地域医療福祉関係機関が連携を強化することの必要性が言われている¹⁾。

このような現状の中で、看護基礎教育における臨地実習は、学生が学内で学んだ知識、技術、態度の統合を図り、看護実践能力の基本を身につけるために不可欠な学習過程であり、看護に必要なコミュニケーションを基盤とした人間関係能力を育成する重要な機会として位置付けられている²⁾。

一方学生の視点から臨地実習を見た場合、患者・看護師・教員との関係構築の他に、記録や学習など毎日

のように課題を抱え、睡眠時間を削りながら実習を行っている学生は多い。しかし、看護学生は目的が明確になると、課題達成のための努力をすることができ³⁾、面白いと感じる学習は、現象と理論の結びつけ、なおかつ、理論を実践へと応用させることができる。それは、患者と看護学生の関係の形成及び発展を自主的な体験へと結びつけることになる⁴⁾。さらに、小林は、学生にとっては臨地実習における達成感や満足感が、その後の学習の動機づけとなり、ひいては職業感にも大きな影響を与えることが予測される⁵⁾、としている。つまり、課題の多い実習の中で、学生の満足度を高めることが学習に大きく影響し、学生の理解を促すと考えられ、満足度を上げるために、教員がどのように関わるべきかが重要となってくる。しかし、山口は自己評価や満足感は学生個々が持っている到達目標との兼ね合いで決定されるものであり、絶対的なものではない⁶⁾、とも述べている。看護学生の臨地実習に

1) 弘前学院大学看護学部看護学科

連絡先：村岡祐介 〒036-8231 弘前市稔町20-7

TEL：0172-31-7100, FAX：0172-31-7101, E-mail：muraoka@hirosaki-u.ac.jp

受理：2020年3月16日

における満足感や達成感についての研究はあるものの、教員の関わりと満足度や実習目標の理解度・到達度への影響について述べられている研究は少ない。

そこで、本研究は成人看護学実習における学生の満足度と実習目標に対する理解度・到達度を調査し、教員の関わりが満足度または理解度にどのように影響しているかを明らかにすることで、実習目標の達成に向けた教員の関わりを検討することを目的とした。

II. 対象と方法

1. 調査対象

2018年8月から2019年6月までに看護学部の成人看護学実習急性期・慢性期を終えたA大学の学生51名。

2. 実習の背景

2018年度の実習については、急性期実習は2施設で実習を行い、慢性期実習は5施設で実習を行った。A大学は3年次後期～4年次前期までの実習である。また、3年次の成人看護学実習の臨地実習の指導を担当したA大学常勤の教員は急性期1名であり、3年次の慢性期実習全てと急性期実習の一部は非常勤実習助手が担当した。4年次は急性期・慢性期ともに常勤の教員が主に担当し、慢性期の一部を非常勤実習助手が担当した。

3. 方法

1) データ収集方法

成人看護学実習の急性期・慢性期が全て終了している4年次の8月に、説明書、無記名自記式の質問紙を配布した。配布時に成績には一切影響しないこと、調査結果から個人が特定されないことを説明し、対象者は説明書を読み、研究協力の意志がある場合は質問紙に回答し、一定期間設置する回収箱へ提出するよう依頼した。なお、質問紙の提出をもって本研究への同意が得られたものとした。

2) 調査内容

- (1) 実習目標に対する学生の理解度・到達度を「全くそう思わない」から「強くそう思う」の5段階で評価した。
- (2) 実習のオリエンテーションや教員の対応、学生の実習の準備等11項目(以下実習への取り組み、教員の対応)とし、「全くそう思わない」から「強くそう思う」の5段階で評価した。
- (3) 実習の満足度を0から10点で評価した。

3) 分析方法

- (1) 成人看護学実習における5つの実習目標に対する学生の自分なりの理解度・到達度と学生の満足度の相関関係(Spearmanの順位相関分析)を解析した。
- (2) 「実習の満足度」を目的変数、「実習への取り組み、教員の対応」を説明変数とし、重回帰分析を行った。

以上の分析には統計解析ソフトSPSS statistics for windows (Ver.17)を用いた。有意水準は5%とした。

4. 研究参加者への倫理的配慮

調査の開始の際に対象者へ口頭および文書を用いて、調査への参加は自由であること、同意を撤回し途中で研究参加を止めるのも可能であること、不参加による不利益はないこと、研究成果を発表する際には個人を特定できる情報は一切提示せず、得られたデータは研究の発表以外の目的では使用しないこと等を説明し、質問紙の提出により同意とした。なお、本研究は弘前学院大学倫理委員会での承認を得たうえで実施した(承認番号19-03)。

III. 結 果

対象学生51名のうち、質問紙を回収できたのは、急性期・慢性期各40名であった(回収率78.4%)。回答に不備があるものを除外し、急性期37名(72.5%)、慢性期38名(74.5%)の回答を分析に用いた。

1) 満足度の得点分布

急性期では3年次に実習を行った学生は27名(73.0%)、4年次10名(27.0%)、慢性期では3年次30名(78.9%)、4年次8名(21.1%)であり、学年による満足度については、急性期全体(37名) 8.43 ± 1.53 で、3年次に急性期実習を行った学生の満足度は 8.20 ± 1.69 、4年次に急性期実習を行った学生は 9.00 ± 0.77 であった。慢性期全体では 6.68 ± 1.67 であり、3年次に慢性期実習を行った学生の満足度は 6.40 ± 1.70 、4年次に慢性期実習を行った学生の満足度は 7.75 ± 0.97 であった。

学生の自由記載では、実習の満足度が9点以上の学生では、「教員が認めてくれた。」「話を聞いてくれた。」「困ったときに教員に相談できた。」などがあり、満足度が5未満の学生では「教員と看護師間の連携が良くなかった。」「教員と看護師の言っていることが違う

表1 実習目標の理解度・到達度に関する回答

人数 (%)

		n	全くそう	そう思わない	どちらとも	そう思う	強くそう思う
			思わない		いえない		
1. 対象の健康状態を理解し、健康障害が及ぼす身体的・心理的・社会的影響を理解できた	急性	37	0 (0)	0 (0)	3 (8.1)	24 (64.9)	10 (27.0)
	慢性	38	0 (0)	2 (5.2)	5 (13.2)	26 (68.4)	5 (13.2)
2. 対象の状況に応じた看護技術を安全・安楽に配慮して提供できた	急性	37	0 (0)	0 (0)	1 (2.7)	22 (59.5)	14 (37.8)
	慢性	38	0 (0)	4 (10.5)	3 (7.9)	24 (63.2)	7 (18.4)
3. 保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働および関係機関との連携のあり方を理解できた	急性	37	0 (0)	0 (0)	6 (16.2)	20 (54.1)	11 (29.7)
	慢性	38	0 (0)	2 (5.2)	8 (21.1)	23 (60.5)	5 (13.2)
4. 看護の対象となる人の権利の保障や倫理的配慮について、常に相手を尊重する態度を養った	急性	37	0 (0)	0 (0)	0 (0)	17 (45.9)	20 (54.1)
	慢性	38	0 (0)	1 (2.6)	2 (5.2)	19 (50.0)	16 (42.1)
5. 対象への支援を通して自己の看護観・死生観を養い、専門職としての倫理的態度を養った	急性	37	0 (0)	0 (0)	1 (2.7)	21 (56.8)	15 (40.5)
	慢性	38	0 (0)	1 (2.6)	2 (5.2)	24 (63.2)	11 (29.0)

表2 実習目標の理解度・到達度と満足度の相関スピアマンの順位相関係数

	急性 (n=37)	慢性 (n=38)
1. 対象の健康状態を理解し、健康障害が及ぼす身体的・心理的・社会的影響を理解できた	0.315	0.486**
2. 対象の状況に応じた看護技術を安全・安楽に配慮して提供できた	0.342*	0.283
3. 保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働および関係機関との連携のあり方を理解できた	0.362*	0.477**
4. 看護の対象となる人の権利の保障や倫理的配慮について、常に相手を尊重する態度を養った	0.283	0.265
5. 対象への支援を通して自己の看護観・死生観を養い、専門職としての倫理的態度を養った	0.308	0.330*

(*p<0.05, **p<0.01)

ことがあった。」などがあった。

2) 実習目標に対する学生の理解度・到達度に関する回答 (表1参照)

急性期では、5つの実習目標に対して自分なりに理解・到達できたかの問いに対して、「全くそう思わない」、「そう思わない」と回答した学生は5項目とも0名であり、「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働および関係機関との連携の在り方を理解できた」に対しては、「そう思う」、「強くそう思う」と回答したものは83.8%と最も低かったが、その他の4つの項目に対しては、「そう思う」、「強くそう思う」と回答した学生が90.0%以上であった。

慢性期では、実習目標に対して自分なりに理解・到

達できたかの問いに対して、「全くそう思わない」と回答した学生は0名であった。実習目標の「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働および関係機関との連携の在り方を理解できた」に対して「そう思う」、「強くそう思う」と回答した学生が最も低く、73.8%だったが、その他の4つの項目では80%以上の学生が、「そう思う」、「強くそう思う」と回答していた。

3) 満足度の得点と実習目標に対する学生の理解度・到達度に関する回答 (表2参照)

急性期実習における実習目標に対する学生の理解度・到達度と学生の満足度の相関関係を解析した結果、実習の満足度が高い学生は、実習目標の「対象の状況

表3 実習への取り組み, 教員の対応に関する回答

人数 (%)

		n	全くそう 思わない	そう思わない	どちらとも いえない	そう思う	強くそう思う
1. 自分は実習の予習・復習・課題学習など積極的に取り組んだ	急性	37	0 (0)	1 (2.7)	6 (16.2)	19 (51.4)	11 (29.7)
	慢性	38	0 (0)	1 (2.6)	9 (23.7)	19 (50)	9 (23.7)
2. 実習用鋼の目的・方法・内容などの記述は適切であった	急性	37	0 (0)	0 (0)	2 (5.4)	27 (73.0)	8 (21.6)
	慢性	38	0 (0)	2 (10.5)	4 (10.5)	28 (73.7)	4 (10.5)
3. 実習前の課題量は適切であった	急性	37	0 (0)	0 (0)	2 (5.4)	25 (67.6)	10 (27.0)
	慢性	38	1 (2.6)	3 (7.9)	6 (15.8)	22 (57.9)	6 (15.8)
4. 実習前のオリエンテーションは分かりやすく, 要領を得ていた	急性	37	0 (0)	0 (0)	1 (2.7)	24 (64.9)	12 (32.4)
	慢性	38	0 (0)	2 (5.3)	4 (10.5)	23 (60.5)	9 (23.7)
5. 実習前の演習は臨床実習に対して有効であった	急性	37	0 (0)	0 (0)	2 (5.4)	22 (59.5)	13 (35.1)
	慢性	38	0 (0)	2 (5.3)	8 (21.0)	18 (47.4)	10 (26.3)
6. 実習指導者(看護師)に対して教員は連携が取れていた	急性	37	0 (0)	1 (2.7)	4 (10.8)	18 (48.7)	14 (37.8)
	慢性	38	0 (0)	7 (18.4)	14 (36.8)	13 (34.2)	4 (10.5)
7. 教員の安全面への配慮・指導は適切であった	急性	37	0 (0)	0 (0)	2 (5.4)	13 (35.1)	22 (59.5)
	慢性	38	0 (0)	5 (13.2)	9 (23.7)	17 (44.7)	7 (18.4)
8. 教員の説明や質問への対応は適切であった	急性	37	0 (0)	1 (2.7)	0	13 (35.1)	23 (62.2)
	慢性	38	0 (0)	12 (31.6)	10 (26.3)	9 (23.7)	7 (18.4)
9. 教員は学生が困っているときに助けてくれた	急性	37	0 (0)	0 (0)	2 (5.4)	11 (29.7)	24 (64.9)
	慢性	38	1 (2.6)	12 (31.6)	8 (21.1)	9 (23.6)	8 (21.1)
10. 教員は学生の意見を認めたくて, アドバイスや指導を行っていた	急性	37	0 (0)	0 (0)	3 (8.1)	12 (32.4)	22 (59.5)
	慢性	38	3 (7.9)	10 (26.3)	7 (18.4)	11 (28.9)	7 (18.4)
11. 実技を体験する機会は十分にあった	急性	37	0 (0)	0 (0)	5 (13.5)	20 (54.1)	12 (32.4)
	慢性	38	0 (0)	5 (13.2)	10 (26.3)	18 (47.3)	5 (13.2)

に応じた看護技術を安全・安楽に配慮して提供できた」(rs=0.342, p<0.05), 「保健医療チームにおける看護者の役割と責任, チーム間の連携や協同及び関係機関との連携のあり方を理解できた」の2項目に対して, 「そう思う」, 「強くそう思う」, と答えており, 相関関係(rs=0.362, p<0.05), にあった。

慢性期では「対象の健康状態を理解し, 健康障害が及ぼす身体的・心理的・社会的影響を理解できた」(rs=0.486, p<0.01), 「保健医療チームにおける看護者の役割と責任, チーム間の連携や協働および関係機関との連携のあり方を理解できた」(rs=0.477, p<0.01), 「対象への支援を通して自己の看護観・死生観を養い, 専門職としての倫理的態度を養った」(rs=0.330, p<0.01) で有意な相関を認めた。

4) 実習への取り組み, 教員の対応に関する回答(表

3参照)

急性期実習における実習への取り組み, 教員の対応では, 「自分は実習の予習・復習・課題学習など積極的に取り組んだ」に対して「そう思う」, 「強くそう思う」と回答した学生が81.6%と最も低く, 次に, 「実習指導者(看護師)に対して教員は連携が取れていた」が86.5%であったが, その他の9項目では「そう思う」, 「強くそう思う」と回答した学生は90%以上であった。慢性期実習では, 「そう思う」, 「強くそう思う」と回答した項目の中で「教員の説明や質問への対応は適切であった」42.1%, 「教員は学生が困っているときに助けてくれた」44.7%, 「実習指導者(看護師)に対して教員は連携が取れていた」44.7%, 「教員は学生の意見を認めたくて, アドバイスや指導を行っていた」47.3%と50%を下回っていた。その他の項目では, 「そ

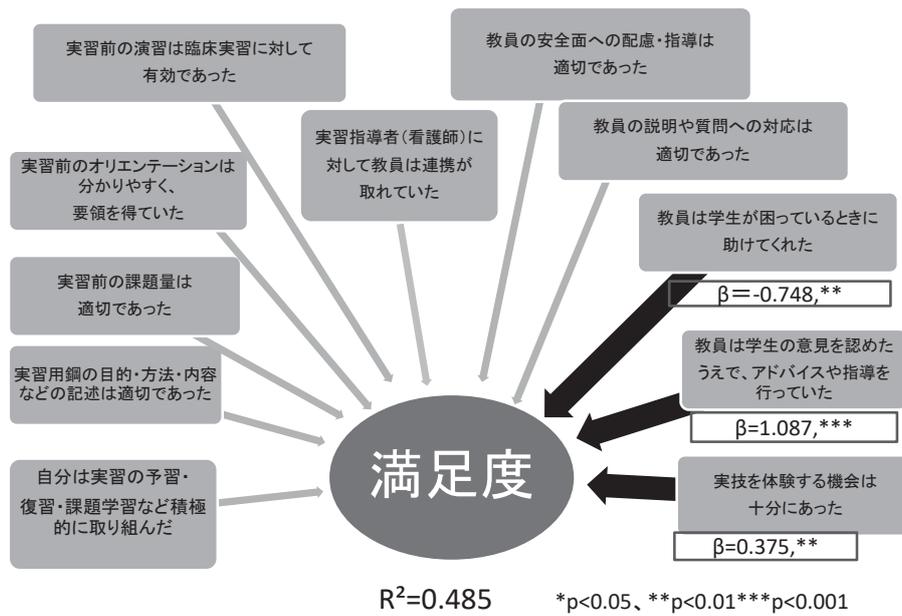


図1 満足度と実習への取り組み・教員の関わり重回帰分析（急性期）

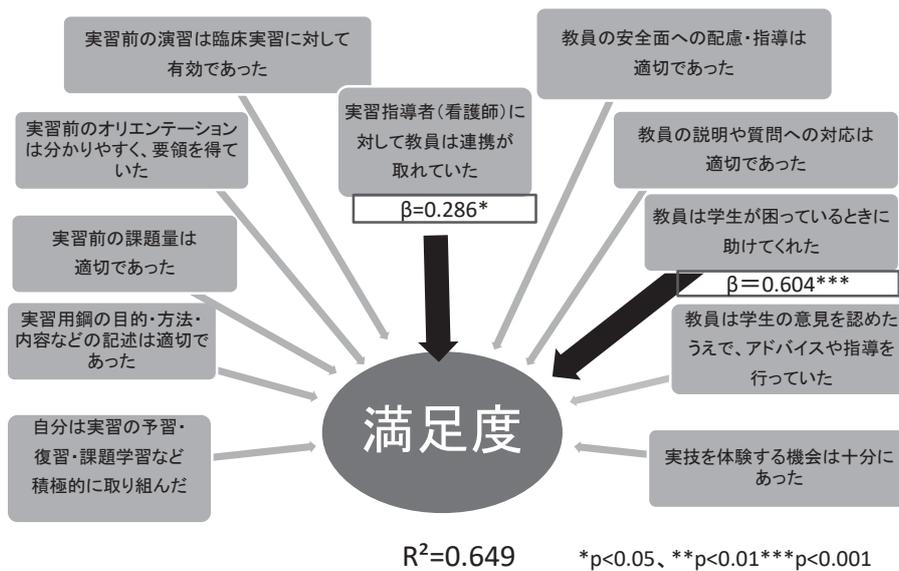


図2 満足度と実習への取り組み・教員の関わり重回帰分析（慢性期）

う思う」, 「強くそう思う」と回答した学生が60%から80%程度であった。

5) 満足度の得点に対する実習への取り組み・教員の対応の影響 (図1, 2参照)

「実習の満足度」を目的変数, 「実習への取り組み・教員の対応」を説明変数とし, 重回帰分析を行った結果, 急性期では, 「教員は学生が困っているときに助けてくれた」 ($\beta = -0.748, p < 0.01$), 「教員は学生の意見を認めた上で, アドバイスや指導を行って

くれた」 ($\beta = 1.0087, p < 0.001$), 「実技を体験する機会は十分にあった」 ($\beta = 0.375, p < 0.001$) の3つの項目が, 実習の満足度に有意な影響を与えていた。重決定係数は0.485であり, 各項目の VIF 1.218~3.675の範囲にあり, 多重共線性の問題を認めなかった。

慢性期では, 「実習指導者(看護師)に対して教員は連携が取れていた」 ($\beta = 0.286, p < 0.05$), 「教員は学生が困っているときに助けてくれた」 ($\beta = 0.604, p < 0.001$), の2つの項目が実習の満足度に有意な影

響を与えていた。重決定係数は0.649であり、各項目のVIF1.682であり、多重共線性の問題を認めなかった。

IV. 考 察

1) 満足度の得点分布

成人看護学実習の急性期における満足度は 8.43 ± 1.53 、慢性期における満足度は 6.68 ± 1.67 と急性期実習の満足度の方が高い傾向にあり、慢性期との違いが見られた。3年次は実習指導を行う常勤職員が急性期・慢性期合わせて1名しかいなかったこともあり、学生の中には実習後学内に戻って再学習をし、教員に相談をしながら解決していきたい学生もいたと考えられるが、実習後に教員に相談できる場が慢性期には十分になかったことも関係している可能性がある。

3年次に実習を行った学生の満足度よりも4年次に実習した学生の満足度の方が高い傾向にあった。これは、3年次にいくつかの実習を行った後4年次に実習を行うため、学生の知識や経験が充足し、3年次に比べて実習に向かう姿勢が構築され、自ら学習する力を徐々に備えていくことによって、実習での達成感を感じ、4年次の満足度が高くなったと考えられる。

2) 実習目標に対する学生の理解度・到達度の分布

実習目標の理解度・到達度を見ると、自分なりに理解・到達できたと感じている学生は、急性期では「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働および関係機関との連携の在り方を理解できた」が最も低く83.8%であったが、その他の4項目に対しては、「そう思う」、「強くそう思う」と回答した学生が90%以上であり、理解・到達できたと感じている、と考えられた。

慢性期では、「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働および関係機関との連携の在り方を理解できた」が最も低く、73.8%であったが、その他の4項目に関しては80%以上の学生が、「そう思う」、「強くそう思う」と回答しておりこちらも概ね理解・到達できたと感じていると考えられる。

急性期・慢性期ともに「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働および関係機関との連携の在り方を理解できた」の項目について、「そう思う」、「強くそう思う」と答えた割合が低い理由として、臨地実習の中では、各病院によって施設内のリハビリテーション・ICU・HCU・地域連携室等の

見学を行っていたものの、日々の実習中にソーシャルワーカー、医師、薬剤師等とのやり取りを見る機会が少なかったと考えられる。看護師は常に各関係機関とのやり取りを行いながら仕事を行っているが、学生がその機会に同席することは少ない。また、患者との関係性の構築やケアに時間を割くことが多いため、見学する機会があったとしても、その場面に意識を向けることが難しい可能性もある。多職種合同カンファレンスへの同席に加え、看護師が各関係機関とのやり取りを行う場面を意識的に見る機会を作れるように支援する必要がある。

3) 満足度の得点と実習目標に対する学生の理解度・到達度の関係

5つの実習目標に対する学生の理解度・到達度と学生の満足度の相関関係を解析したところ、急性期では、実習目標の「対象の状況に応じた看護技術を安全・安楽に配慮して提供できた」、「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働及び関係機関との連携のあり方を理解できた」、という2項目で満足度との有意な相関を認めた。慢性期では、「対象の健康状態を理解し、健康障害が及ぼす身体的・心理的・社会的影響を理解できた」、「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働および関係機関との連携のあり方を理解できた」、「対象への支援を通して自己の看護観・死生観を養い、専門職としての倫理的態度を養った」の3項目で相関関係を認めた。A大学の急性期実習では、周手術期の患者を受け持つため、日々の患者の変化に合わせて、今まで学習してきた看護技術を駆使して早期離床時の患者の安全・安楽といった部分に目を向けることができたと考えられる。また、これらの場面の中で、リハビリテーションや薬剤師・ソーシャルワーカーなどのチームの連携の場面に立ち会えた学生と立ち会えなかった学生がいたと考えられ、チームの連携の場面に立ち会うことができたと感じた学生が「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働及び関係機関との連携のあり方を理解できた」と感じていたと考えられる。また、慢性期では慢性期患者特有の長期的な治療と向き合いながら生活の再構築をしていくといった患者を受け持つため、退院に向けたチーム間の連携の場面を意識的に見ることや、ターミナル期の患者などを受け持つことを通して、自己の看護観や死生観といった部分に目を向けることができたのでは

ないかと考えられる。片山らの研究では、実習満足度は、評価とは有意な相関はなかった⁷⁾、とされている。本研究の結果では、学生の満足度と実習目標に対する自己評価に相関関係を認め、実習目標の一部ではあるが、理解・到達度が高いと感じていたことは、実習評価にも関連する可能性は十分に考えられる。

満足度が高い学生は、患者の安全・安楽に配慮するという看護の根本的な部分を学習できる環境にあったと考えられる。また、前述したように、「保健医療チームにおける看護師の役割と責任、チーム間の連携や共同および関係機関との連携の在り方を理解できた」という項目では慢性期・急性期ともに理解・到達できた、と感じている割合は最も低い項目である。しかし、リハビリテーションや地域連携室のソーシャルワーカーの活動を見ることでチーム医療における他職種連携や看護師のやり取りを実践的に学ぶ機会につながったと考えられる。

4) 実習への取り組み、教員の対応の割合

実習への取り組み、教員の対応は、急性期では全ての項目で80%以上が「そう思う」、「強くそう思う」と回答していたが、慢性期ではそう思う、強くそう思うと回答した学生が50%を下回る項目もあり、これからの課題と考えられた。A大学では慢性期の方が急性期に比べ、複数の病棟にまたがり、かつ一度に見る学生数が多い。そのため、一人の教員が複数の病棟・学生を受け持つことになり、病棟に不在になる時間が多かったことが関係していたと考えられる。学生にとっては、疑問に思った時や相談したい時に教員が不在になってしまうことがあり、困っている時に対応してもらえなかった、と感じている可能性もある。

実習の満足度が9点以上の学生の自由記載として、「教員が認めてくれた。」「話を聞いてくれた。」「困ったときに教員に相談できた。」などがあり、学生は、実習中の教員に対して話を聞いて認めてほしい、という欲求があると考えられる。学習者として承認されることは、自信や安心に繋がり、積極的に実習を進めることで、達成感が得られ、満足感を高めることにつながったと考えられる。満足度が5点以下の自由記載には「教員と看護師間の連携が良くなかった。」「教員と看護師の言っていることが違うことがあった。」などがあった。本来は教員と指導者の両者にサポートされた状態で実習できることが望ましい。教員と指導者の連携という面では、教員と臨床指導者のコミュニ

ケーション不足が指導の一貫性がなくなる理由⁸⁾として言われており、学生は「どちらかを立てればどちらかが立たず。」と誰にも相談できずに2つの異なる指導方針の間で悩むことになる。そのため、臨床指導者と教員の指導が違うことや両者の連携が不十分だと感じることで、学生は混乱し、質問をして問題解決をすることが困難になると考えられる。学生は、まだ自分のアセスメントや援助に自信がない状態にあり、教員と指導者の指導内容が異なることは迷いを増長させ、実践がこれでいいのか、違うのか、と確信が持てないまま実習を終えることになる。このように迷いを起こすことで、実習の満足度が低くなると考えられる。

5) 満足度と実習への取り組み・教員の対応

重回帰分析の結果から、急性期では「教員は学生の意見を認めたいうで、アドバイスや指導を行っていた」、「教員は学生が困っているときに助けてくれた」、「実技を体験する機会は十分にあった」という項目が満足度に有意な影響を与え、慢性期では「実習指導者(看護師)に対して教員は連携が取れていた」、「教員は学生が困っているときに助けてくれた」という項目が満足度に有意な影響を与えていた。このことから、学生は実習中の教員との関係性に自分自身を認めてもらうことと、学生が困っているときに助けてくれた、ということ、さらに、臨地という現場で看護技術を行う場を提供することが満足度に影響している。石川らは、臨地実習を効果的に行うためには、学生のやる気に働きかけ、自信をもたせ、できるという感覚を持たせることが必要である⁹⁾。と述べている。また、稲山らは、看護学生を取り巻く臨地実習指導者や教員は、学生の自己効力感を育むために、言語的説得や指導的関わりを通して、成功体験を重ねさせる。それらの学びを通して学生は、見て学ぶから実際に主体的な学びに行動変容することになる³⁾、とされ、本研究でも同様に、学生が教員に認められている、話を聞いてくれると感じた学生の実習満足度は高かった。これは、実習中に認められている、と感じることで自己効力感が高まり、実習の中で学生の行動変容を促すことができ、学生の目標への到達度が高くなると考えられる。学生の自主性を大事にすることは学生の興味を高める教員の役割の1つとされ¹⁰⁾、青年期にある学生の多くは、まだ発達途中の部分を持ち、不得手な領域であっても本人が伸ばしたいという意欲があり、なおかつ力を発揮できる条件さえ整えばそこから発達し始めると考え

られている¹¹⁾。したがって、教員は学生の学習する環境を整え、成長を信じて見守る、という姿勢が必要である。「実技を体験する機会は十分にあった」という項目が満足度に影響していたことから、臨地実習の学習環境を整え、様々な看護技術の体験をする機会をつくることは教員の重要な役割の一つと言える。

以上の結果から、実習中の教員の関わりとしては、教員が学生の意見を否定することよりも、学生の意見に耳を傾け、その考えを認めた上でアドバイスや指導を行うことが必要である。また、困っている時には可能な限り手を差し伸べ、実習中の精神的な支えにもなること、さらには学生が学習しやすい環境を整え、病棟と連携して看護技術を体験する機会を提供することが重要である。このような教員の関わりによって、学生の実習中の満足度が高まり、自主的な学習が促進され、さらには、学生の実習目標の理解度・到達度に影響を与えることが示唆された。

V. 結 論

1. A大学における成人看護学実習の学生の満足度は、急性期が平均 8.43 ± 1.53 、慢性期が平均 6.68 ± 1.67 であり、慢性期の満足度が急性期よりも低かったことは、今後の課題でもあり、慢性期・急性期共に学生の満足度を高めるように取り組む必要がある。

2. 実習における満足度と実習の理解度・到達度については相関関係があり、満足度が高い場合、「対象の状況に応じた看護技術を安全・安楽に配慮して提供できた」、「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協同及び関係機関との連携のあり方を理解できた」、という2項目で満足度との有意な相関を認め、慢性期では、「対象の健康状態を理解し、健康障害が及ぼす身体的・心理的・社会的影響を理解できた」、「保健医療チームにおける看護者の役割と責任、チーム間の連携や協働および関係機関との連携のあり方を理解できた」、「対象への支援を通して自己の看護観・死生観を養い、専門職としての倫理的態度を養った」という3つの項目で満足度との有意な相関を認めた。

3. 実習における満足度を高める影響因子として、「教員は学生の意見を認めた上で、アドバイスや指導を行ってくれた」、「教員は学生が困っているときに助けてくれた」、「実技を体験する機会は十分にあった」、「実

習指導者(看護師)に対して教員は連携が取れていた」という教員の関わりが、満足度に有意に影響していた。

VI. 研究の限界

本研究はA大学学生のみを対象であり、実習背景としても教員が充足していなかったことや、教員と学生との関係性が構築されていたか否かも、結果に影響している可能性があり、満足度については他の様々な因子が影響していることも考えられる。また、理解度・到達度は学生の自己評価であり、教員による他者評価ではない。そのため、自己評価と他者評価の違いについても考慮し、満足度に関係するその他の項目についてもさらに検討していく必要がある。

文 献

- 1)平成30年度一般社団法人日本看護系大学協議会定時総会「看護系大学の現状と課題」www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/06/monbuk, 参照日2019年6月18日
- 2)看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書, 厚生労働省 www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html, 参照日2020年1月9日
- 3)稲山明美, 伊東美佐江, 松本啓子, 山本加奈子 (2018), 看護学生の効果的な臨地実習へ向けた自己効力感に関する検討, 川崎医療福祉学会誌, Vol. 28, No.1, 37-46
- 4)安藤史子 (2015), 学生にとっての実習教育, 安藤史子編集, 経験型実習養育—看護師をはぐくむ理論と実践—, 医学書院, 11-22
- 5)小林照代, 浦綾子, 平直子, 東辻ケイ子 (2000), 学生が「学べた」とする実習での学習内容と影響要因の調査—実習深度に伴う変化—, 第31回日本看護学会集録(看護教育) 36-38
- 6)山口桂子 (1991), 臨床実習における学生の満足度と実習指導について, 看護教育, 32 (2), 95-99
- 7)片山由美, 奥津文子 (2003), 臨地実習目標達成度評価と実習満足度との関連—学生の満足度を組み入れた臨時実習目標達成度評価の一考察—, 京都大学医療技術短期大学部紀要, 23巻, 33-42
- 8)ローザン由香里 (2018), 実習で悩む看護学生のおまじきを解決する個別対応策の導き方, 日総研第1版, 名古屋
- 9)石川恵子, 内海桃絵 (2016), 看護学生における臨地実習へのモチベーション, 京都大学大学院委託研究科人間健康科学系専攻紀要, (11), 11-16
- 10)神郡博 (2018), 看護教育を支える視点と展開, 看護の科学社第1版, 東京都

- 11) 國眼真理子(2007), いまどきの若者の考え方・育て方, 日総研出版第3版, 名古屋
- 12) 辻村弘美, 中村美香, 桐山勝枝, 柳奈津子, 金井好子, 佐藤未和, 他 (2013), 基礎看護学実習における学生実習満足度と学生指導体制に関する考察2011・2012年度と2013・2014年度を比較して, 群馬保健学紀要, 36, 21-29
- 13) 柘野浩子, 塩見和子, 小野春子 (2011), 成人看護学実習の実習指導に対する学生の授業評価-授業評価スケール活用の予備的調査-, 新見公立大学紀要, 第32巻, 129-135
- 14) 片山由美, 奥津文子, 大矢千鶴, 赤澤千春, 荒川千登世 (2012), 臨時実習において学生が満足・不満足であるとした場面の検討—臨時実習指導の在り方の一考察—, 京都大学医療技術短期大学部紀要, 22巻, 53-65

The satisfaction of students during adult nursing science training and affiliated examination of the relation to goal achievement of the teacher

Yusuke MURAOKA¹⁾, Mitsuko TATEYAMA¹⁾, Mikiko IZAWA¹⁾, Yoko TSUCHIYA¹⁾

Abstract: The purpose of this study was to investigate the relationship between student nurse practitioners training satisfaction and degree of understanding and goal achievement and to clarify the relation of supervising teachers' influences on satisfaction, goal achievement, and degree of understanding. I performed an anonymous independent survey of 51 nursing students who finished the adult nursing science training of University A. The results showed a relationship in terms of satisfaction, with "the teacher listening to student opinions and giving advice and guidance", "helping when students had problems" and "opportunities to experience practical skills were enough" as well as "supporting relations between supervising nurses and the students." Furthermore, the data showed a statistically significant correlation between satisfaction, understanding, and goal achievement, it suggested that student goal achievement and understanding was higher when satisfaction was high. In other words, the relationship of the teacher in the training leads to a rise in satisfaction of the student and is connected to a rise in degree of understanding.

Key words : nursing student, training satisfaction, relation of the teacher, an understanding degree and arrival degree of the training target

1) Department of Nursing, Hirosaki Gakuin University

Contact information: Yusuke Muraoka

〒036-8231 20-7 Minorucho, Hirosaki-shi

TEL: 0172-31-7100, FAX: 0172-31-7101, E-mail: muraoka@hirosaki-u.ac.jp